

Title	石川啄木と漢歌
Author(s)	福井, 智子
Citation	大阪大学言語文化学. 2003, 12, p. 33-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77947
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

石川啄木と漢詩^{からうた}*1)

福井 智子**

キーワード：石川啄木、漢詩、中国古典文学の受容

石川啄木喜爱中国古典文学，尤其喜爱汉诗。这是迄今为止诸多的先行研究曾多次指出的。如他的日记和书信中均记载了他熟读《三国志》《水浒传》以及白居易、杜甫的汉诗及《唐诗选》《三体诗》《宋元明诗选》等作品的情形和感受。另外，翻开他的主要著作《一握之沙》就能发现他的许多短歌曾受到唐诗的影响。其实，他对汉诗的兴趣并非仅仅停留在对古典汉诗的欣赏并受其影响而创作短歌上。事实上，他本人也作过三首汉诗并写过两首以北海道生活时期所接触的汉诗为题材的短歌。

有关啄木本人创作的汉诗及以北海道生活时所接触到的汉诗为题创作的短歌，在以往的啄木研究中几乎未曾提及。然而，考察石川啄木与汉诗的关系，就不仅要考察他对中国古典文学的学习经历及从中所受到的影响，还要注重对上述作品的研究。为此，本论文的目的在于透过石川啄木本人创作的汉诗及吟咏忆起的汉诗的短歌，来进一步探讨他对汉诗的认识。

啄木汉诗的最大特点在于不合平仄，押韵的韵律，为此有些啄木研究家曾指出：“啄木并不具备做汉诗的素养。”这种观点从某种意义上说不无道理。然而，从啄木创作和欣赏汉诗的情况来考虑，就会发现啄木对汉诗的兴趣在于汉诗与日文所不同的，特有的韵味和文体。的确啄木原本对做正统的汉诗兴趣不大，否则他也不会敢于创作不合韵律的汉诗。另外，从他以北海道时期所接触的汉诗为题材所作的短歌中，也可以看出他是想通过回忆当时口中吟咏汉诗的自己的过去，来逃避哪怕是短暂的艰难的现实，以使自己的内心得到慰藉。

可以说，石川啄木在汉诗中寻求的是与自身的距离。这里所说的距离一是他日常生活中所使用的日语与汉诗所特有的余韵及文体间的距离，二是他自身的现状与汉诗所描绘的内容间的距离。这个距离越大，啄木所接触的汉诗就越使他的内心得以慰藉。

* 石川啄木与汉诗(福井智子)

** 大阪大学言語文化部非常勤講師

¹⁾本稿は、和漢比較文学会第七十三回例会(2001年11月10日 於甲南大学)で口頭発表した内容に加筆、修正したものである。

1. はじめに

『一握の砂』、『悲しき玩具』の代表作で知られる石川啄木は、明治期の多くの知識人がそうであったように、中国古典文学、特に漢詩に強い関心を持ち、そして親しんだ人物であった。例えば啄木の日記や書簡には、『三国志』『水滸伝』とともに、『三体詩』『白居易詩集』『宋元明詩選』及び杜甫の詩集、そして『唐詩選』を読んでいた様子を窺うことができる。とりわけ『唐詩選』は、折に触れては読み返し、更には友人達にも読むことを勧めた、啄木の愛読書の一つであった。また『一握の砂』に収められた作品に、漢詩に着想したものが多く見られることは、従来の研究でも繰り返し指摘されてきた²⁾。

ところで啄木の中国古典文学、なかでも漢詩観に焦点を置いた先行研究としては、林丕雄氏の「啄木と中国一唐詩選をめぐって」³⁾と、池田功氏の「石川啄木と中国古典文学」⁴⁾が挙げられる。両研究は共に、歌だけでなく、日記や評論と言った様々な資料を詳細に検証した点を特徴とし、豊富な例示で啄木の漢詩観を考察した内容と言える。しかしこれらの詳細な研究においても、殆ど触れられずに残された点が指摘できる。それは啄木自作の漢詩と、啄木の歌に歌われた「漢詩」への視点である。前者については技法上の問題から、啄木は「漢詩をつくるまでには至らなかった」という議論も存在し、そもそも問題視しない傾向さえある⁵⁾。しかし以下に取り上げる作品は、その形式及び制作状況からも、やはり漢詩を意識した創作であることは確かで、積極的に漢詩と捉えて構わないのではなかろうか。また技法上の難点は、啄木の漢詩に対する素養だけでなく、ある種の姿勢の表れとも捉えられる。啄木が自ら手がけた漢詩、そして歌にまで歌った漢詩も視野に入れた上でこそ、啄木の中国古典受容、そして漢詩観は言及されるべきかと思われる。

以上の考えに基づき、本稿は上記の二項目を中心に、啄木の漢詩観に対する再検討を試みる。そして啄木と漢詩の関係の上に、新たな側面を見出したいと思う。

2. 啄木の漢詩

啄木の自作漢詩は、現在、全集を通じて見る限りでは、以下の三首が確認される。各詩について、制作順に内容と制作に至った背景を見ていきたいと思う⁶⁾。

²⁾最近では石川忠久氏が「岳堂詩話—啄木と漢詩」(七)、(八)、『學燈』第97巻第10、11号(丸善 2000)で、啄木の歌に見られる漢詩文の影響を、多くの例を挙げて考察されている。

³⁾『論集 石川啄木』(国際啄木学会 1997)所収。

⁴⁾『明治大学教養論集』第263号(1994)所収。

⁵⁾『石川啄木事典』(国際啄木学会編集 2001)第二部 項目篇「漢詩」p. 276

⁶⁾引用する啄木の漢詩、日記及び小説は、『石川啄木全集』全八巻(筑摩書房 1978-1980)を底本とする。漢詩の訓読は筆者による。

陰雨三日霽 陰雨 三日して霽れ
 暑消塵不動 暑消えて 塵は動かさず
 窓前一風過 窓前 一風過ぎ
 竹声似秋声 竹声 秋声に似たり (明治41年5月29日 大島経男宛書簡)

まず一首目は、大島経男宛の書簡に書き留められていた。大島は啄木が函館時代に知り合い、終生にわたって敬意を払った友人として知られる。詩の内容は、雨が上がり青空が戻ってきた。暑さはこれで一段落といった所で、周囲を舞っていた塵ももはや落ち着いてきた様子だ。そして窓辺を過ぎる風に、竹が音を立てて揺れている。あたかも秋の気配を感じさせる、そんなさわやかな音である、と。一見、季節の変わり目を喜ぶ内容ともとれそうであるが、その前後の書簡の文面を読めば、状況がそうでなかったことが判明する。

書けば書くによい事が山々あります、然し今日は一昨日から、此頃打続きの霖雨のせいにか心地がすぐれず、床の中にくろがつてをります、雨は今朝あがつたが、袷に襦袢かさねても瘦腕に粟が出来る程寒い、

(引用漢詩)

など、出鱈目を云つて煙草を吹かして見ても、あまり非人情な心地になれません、…

ここで言う「非人情」とは、夏目漱石の『草枕』で知られる、世間一般の義理・人情を超越した境地の意であろう。つまりこの時の啄木は「非人情」を味わう為に、漢詩の制作を試みたと言える。実際のところは自身も認める通り、内容も技法も「出鱈目」な漢詩を作ってみたものの、結局、「非人情」な心地になりきれなかった。しかし啄木の漢詩観を考える上で、この「非人情」の実践との関係は、注目される点かと思われる。

二首目の作品は、日記の一部として書き留められたものである。

一身為軽舟 一身 軽舟と為り
 悲秋常無錢 悲秋 常に錢無し
 自称不孝兒 自ら不孝の兒と称し
 苦思強苦笑 苦思し 強いて苦笑す (明治41年9月27日日記)

またこの日の日記には、白居易の詩を読んだという記述と共に、作りかけか、或いは先の詩と合わせて律詩にでもしようとしたのか、漢詩の断片のようなものも見られた。

白詩に親む。共に琵琶行を吟じて花明君（筆者注：金田一京助）の眼底涙あるを見、
 憮然として我の既に泣くこと能はざるを悲む。

暮天秋雲迢。惆悵故園心。幼時母に強請して字を書かしめたることを思出でて、客
 思泣かむと欲す。涙流れず！

（引用漢詩） !!!

（明治41年9月27日日記）

更にこの前後数日の日記にも、啄木の漢詩に親しむ様子が見られた。例えば、「白樂天
 に親む。白氏は蓋し外邦の文人にして最も早く且つ深く邦人に親炙したるの人。長恨歌、
 琵琶行、を初め、意に會するものを抜いて私帖に寫す。詩風の雄高李杜に及ばざる遠し
 と雖ども、亦才人なるかな。」（9月26日）、「杜甫を少し讀む。字々皆躍っている様で言々
 皆深い味がある。無論樂天など同日に論すべきものではない。これに比べると、白は
 第三流だ。」（9月29日）、「夜、金田一君と麥酒をのみ、蕎麥をくひ乍ら、宋元明詩選を
 讀んだ。」（9月30日）等である。漢詩にかなり傾倒していた時期だと言える。

では、先に挙げた啄木の漢詩に戻ることにする。まず出だしの「一身為輕舟」である
 が、これは吉川幸次郎氏も指摘されたように、唐の詩人、常建の五言古詩「西山」の第
 一句を借りる⁷⁾。「西山」は、『唐詩選』所収の作品である。作詩の際、啄木の念頭にこ
 の詩があったことは間違いない。また二句目の「悲秋」の語句には、同詩集中の杜甫の
 「秋興」からの影響も窺われる⁸⁾。しかしこれ以外には、特定の典拠を見つけることは
 できない。他は皆、啄木自身の創作と言える。そもそも「常に錢無し」「不幸の兒」「苦
 思し 強いて苦笑す」、及び最後に付けられた感嘆符「!!!」等は、日記の一部を漢詩の
 形に仕立て直した趣を持つ。言うまでもなくここに詠まれているのは、小説家の夢がは
 かなく破れ、経済的困難に陥っていた、当時の啄木の姿である。それが漢詩の形式で綴
 られたことで、啄木の現状は唐代の詩人へとスライドし、どうにか客観視に堪えうるも
 のとなるのであった。

一首目の「陰雨三日して霽れ…」とこの「一身輕舟と為り…」は、啄木が一年間の北
 海道生活を切り上げ、小説家を目指して上京した後の数ヶ月間に制作された。一方、三
 首目の作品は、啄木晩年の明治44年に制作されている。

新春与友遊塔下 新春 友と塔下に遊ぶ
 塔下園中夜寂々 塔下園中 夜寂々

⁷⁾ 吉川幸次郎『漢文の話』（ちくま文庫）（筑摩書房 1986）「はじめに」p.20。常建の「西山」の最初の二句は、「一身為輕舟、落日西山際」となっている。

⁸⁾ 例えば、『唐詩選』に所収される杜甫の七言律詩「登高」：「萬里悲秋常作客、百年多病獨登臺」

空屋軒暗歌笑遠　空屋　軒暗く　歌笑遠し
初知天下不景氣　初めて知る　天下　不景氣たるを　李啄木

(明治44年1月8日　宮崎大四郎宛書簡)

この詩は、啄木の最大の金銭的援助者で、また啄木が最も信頼を寄せていた函館の友人、宮崎大四郎（郁雨）宛の寄せ書きの書簡に記された。函館時代に知り合った友人、丸谷喜市と並木武雄と三人で寄せ書きをし、啄木は自らの分として書き付けたものがこの詩であった。啄木の日記はその時の様子について、以下のように記録している。

…日が暮れて丸谷君と並木君が来た。二人は朝から遊び廻つてゐたんださうである。急に仮面会を開くことになつて、浅草に行き、ルナパークでピラアスレースに入り木馬に乗つた。それから塔下苑をブラついて、とある馬豚肉で豚をくひ、酒をのんだ。その時三人寄せ書きで岩崎宮崎二君へハガキを出した。それからまた汁粉を食つて遅く帰つた。新年になつてから初めて遊んだわけである。　(明治44年1月8日日記)

日記中のルナパークとは、明治43(1910)年に浅草六区のパノラマ館跡地に開場した、アメリカ式のハイカラな遊園地を指す。また塔下苑(園)は、同地の正面にそびえ立つ凌雲閣階下、いわゆる「十二階下」の私娼婦街を言う。啄木の日記は、浅草を散策した三人がごちそうと飲酒で盛り上がり、その勢いで共通の友人に寄せ書きした様子を伝える。啄木以外の二人は、この時の浮かれた気分を次のように認めた。まず丸谷は、「N君に案内されて生まれて初めて三越のデパートメントストアなるものを見た、N君は凡てに於て僕の先輩である、然り塔下園に於ても。喜」と、そして並木は、「ルナパークで木馬に乗つた。生まれて初めての乗馬尻が痛かつた。塔下園でM君女に抱きつかれて大に得意になつている。武」と書くのであった。

この丸谷と並木の文面からは、両者の関心が専ら、浅草の繁華な様子と塔下園で商売する女性達にあったことがわかる。一方、かつて塔下苑に通い詰めた経験を持つ啄木ではあったが、この時の視点は先の二人といささか異なるものを捉えていた。まず寄せ書きの文体として、漢詩が用いられた。勿論、署名の「李啄木」は、李白をもじる。そして内容では、繁華な光景の中に潜む景気停滞に触れるのであった。一人だけ寄せ書きに硬質な字面を選んだその意外性、歓楽街の背後に社会不安を見る眼差し、そして聊かふざけた署名。啄木一流のユーモアと社会批判の精神が、ここに共存していたと言える。

さて以上が啄木自作の漢詩であるが、その特徴はと言えば、平仄や押韻といった漢詩の規則が殆ど守られていない点であろう。特に三首目は、内容といい署名といい、漢詩

よりも狂詩の趣すら感じられる。しかしこれら三作品を一応漢詩として捉える立場から見れば、寧ろここには、啄木の漢詩観が現れているように思われる。それは啄木の、文学上の複雑な規則に囚われず、単に漢詩の持つ字面、そして訓読の際の音の響きを専ら楽しむといった、極めて自由で気楽な姿勢である。三首が皆、ある種のユーモア、遊びの気分を伴って制作された経緯も注目されよう。これらについては本稿の最後で、再度触れることにする。

3. 啄木の歌に詠まれた漢詩

本稿の冒頭でも述べたように、以下では啄木が「漢詩」を「からうた」と読ませて、自らの思い出の漢詩を歌った二作品に注目したいと思う。これらは、『一握の砂』中、啄木が明治40年5月から約一年間に及ぶ、北海道での漂泊の生活を回想する作品を収めた、第四章「忘れがたき人人」中に見られるものである。

はこだて くわきう やま はんかく
函館の臥牛の山の半腹の
ひ からうた
碑の漢詩も
なかば^{わす}忘れぬ

(歌集初出か)⁹⁾

まず一首目であるが、歌中の「函館の臥牛の山」とは、函館山のことである。そして「碑の漢詩」は、函館山の中腹にある、函館戦争で没した反政府軍将校を弔う碧血碑横の、ごく目立たない碑に刻まれた漢詩を指した。次に示す七言絶句が、この「碑の漢詩」の全文である¹⁰⁾。

戦骨全収海勢移	戦骨 ^{すべて} 全て収められて海勢移り
紛華誰復記當時	紛華 ^{また} 誰か復 ^{また} 當時を記さん
鯨風鱒雨函山夕	鯨風鱒雨 ^{げいふうがくう} 函山の夕
宿草茫々碧血碑	宿草 ^{ぼうぼう} 茫々たり碧血の碑

この詩を詠んだのは、宮本鷗北(1836-1916)という漢詩人である。鷗北は明治34年にこの地を訪れた。当時の文人墨客の多くがそうしたように、鷗北は碧血碑、五稜郭を逍遙する。その時、函館戦争に思いを馳せて詠んだのが、この「碑の漢詩」であった。

⁹⁾引用する啄木の歌は、今井素子注釈『石川啄木集』(『日本近代文学大系』第23巻)(角川書店 1969)を底本とする。

¹⁰⁾以下に引用する漢詩と作者については、永田敏雄『道南の碑』(幻洋社 1996)を参照する。

詩は函館戦争から三十年以上の時が流れ、目前の繁華な光景には、もはや当時の面影を留めるものは何も見あたらない。ただ戦没者を弔う碧血碑（筆者注：明治8年建立）のみが、生い茂る草の中に佇んでいるばかりだ、と歌った。この詩を刻んだ碑は、明治34年中に建立された。

啄木が「碑の漢詩」を初めて目にしたのは、明治40年の初夏である。それは故郷を追われるように北海道・函館にやって来て、まだ日も浅い頃であった。友人の大島常男の回想によれば、「碑の漢詩」を朗吟した時、啄木は次のような様子であったと言う。：「客（筆者注：啄木）は今日から新たに落付く生活の事を考へて、あはい幸福さと好奇心との雑つたものを味はつてゐた。（中略）…長い嘆息のあとに、『あの詩がこんなに愛唱されてゐるとは知らなかつた。』とうめいた¹¹⁾。」内容もさることながら、鷗北の詩が函館の人々に親しまれてきたことに対し、啄木の感動はかなり大きかったと見える。

啄木にとって函館時代は、経済的な豊かさにはほど遠かったものの、友人には極めて恵まれた時期であった。それは大島をはじめ、啄木自作の漢詩のうち、三首目の誕生に関わった宮崎、並木、丸谷といった、地元の文学サークル苜蓿社の面々との交流による。文学上の良き友を得たことが、啄木の生活にささやかながらも幸福感をもたらさなかったはずはない¹²⁾。

しかしこの函館の生活は、決して長くは続かなかつた。8月に起こった大火災により、啄木は荒廃した函館を後にする。そして函館から札幌、小樽、釧路へとおよそ一年で移動し、ついには本格的に小説を書く為、単身で東京へと向うのであつた。ところが東京での生活と言へば、早くも創作活動に行き詰まりを感じ、経済的困窮に喘ぐ日々を送ることとなる。こういった状況下で啄木の心の支えとなつたものは、先に見た自作漢詩とともに、函館での思い出の数々であつた。あの「碑の漢詩」のように薄れ行く記憶の断片を、啄木は歌に詠むことで、懸命にたぐり寄せていたのである。

ではもう一首の「漢詩」を歌つた作品について、以下に見ていくことにする。

十年まへに作りしといふ漢詩を
 酔へば唱へき
 旅に老いし友

（明治43年11月「スバル」初出）

ここで歌われる「漢詩」は、「旅に老いし友」菊池武治が詠んだものを指す。菊池とは、啄木が『釧路新聞』で活躍していた時に出会う、ライバル新聞『北東新聞』の一記者で

¹¹⁾南部三郎「啄木の歌から（四）」『呼子と口笛』（1930）参照。

¹²⁾岩城之徳監修『石川啄木入門』（思文閣出版 1992）参照。

あった。彼は青年時代に医師を志して上京し、勉学に励んだ。しかしその目的を果たすことはできず、郷里の岩手に舞い戻る。一時期、県庁に職を得ていたが、その後北海道へと渡り、新聞記者、地方吏員生活を送った。結局、志を得ぬ不遇な生涯であったと伝えられる¹³⁾。

さて啄木の日記を見ると、菊池に触れた箇所がいくつか確認される。そのうち以下に引くものは初対面の菊池に対する印象であるが、これはまた、啄木の菊池観をほぼ集約したものでもあった。

五時帰宿。程近い宿に小泉君を訪ふと、北東社に新たに入社した菊池君が居た。(中略) 菊池君は漢文にアテられた男である。正直で気概があつて、為に失敗をつづけて来た天下の浪士である。年將に四十、盛岡の生れで、怖ろしい許りの髭面、昔なら水滸伝中の人物、今なら馬賊と云つた様な人物。(中略) 快男子菊池、飲む事宛ら長鯨の百川を吸ふが如し。… (明治41年3月20日日記)

まずここからわかることは、啄木より二十歳程年上の菊池が、東洋の古典的英雄の風を持つ人物であった点である。外見は勿論のこと、飲みっぷりの豪快さも杜甫の「飲中八仙歌」¹⁴⁾の一部でもって形容される程であった。また菊池の義理堅く、友情に厚い側面も、啄木のこういった菊池観をより強固にしたと思われる。例えば、この後まもなく啄木は、北海道を去り東京へと向かうのであったが、その時、菊池は途中で立ち寄る宮古にいた知り合い宛に紹介状を書き、啄木に持たせてやった。啄木はこの紹介状を持参して宮古の医師宅を訪れ、ごちそうに与ったと言う¹⁵⁾。

それから菊池は先述したように、世渡りは全く上手くなかった。実は新聞記者であることも、不本意な選択の一つにすぎなかった。「菊池君は漢文にアテられた男である。」は、啄木が菊池の人生における失敗の多くを、東洋の古典的豪傑風を感じさせるその人物性に見ていたことを示す。

日記以外にも啄木は、菊池への印象を書き留めていた。それはこの釧路時代の友人をモデルにした、その名も小説『菊池君』(明治41年 未完)である。主人公の名前については、本名「菊池武治」の一部を改め、「菊池兼治」とされた。しかし、いくらか小説

¹³⁾ 岩城之徳『啄木全作品解題』(筑摩書房 1987) p.128

¹⁴⁾ 杜甫「飲中八仙歌」:「左相日興費萬錢、飲如長鯨吸百川、銜杯樂聖稱避賢」

¹⁵⁾ 「飯を食ふ間に、菊池君が宮古の道又金吾といふ醫者へ紹介状を書いて呉れる。十時波止場へ行く。遠藤君に逢つた。波が高い。十時半波止場に菊池君と手を分つて舢に乗つた。」(明治41年4月3日)、「午後二時十分宮古港に入る。…菊池君の手紙を先きに届けて置いて道又金吾氏(醫師)を訪ふ。御馳走になつたり、富田先生の消息を聞いたりして夕刻辭す。」(明治41年4月6日)。

的誇張を伴った全く風采の上がらない様子(「新聞記者社会には先づ類の無い風采」、「浮東洋の古典的英雄風の菊池が、そこには描かれていた。

が、此妄想から、私の頭脳あたまに描かれて居る菊池君が、怎どうやら、アノ髭で、権力の圧迫を春風と共に受流すと云った様な、気概があつて、義に堅い、豪傑肌の、支那的色彩を帯びて現れた。私は、小さい時に読んだ三国史中の人物を、それか、これかと、此菊池君に当嵌めようとしたが、不図、「馬賊の首領こんなんに慥どう麼男は居ないだろうか。」と云ふ気がした。

馬賊…満州…と云ふ考へは、直ぐ「遠い」と云ふ感じを起した。… (『菊池君』)

では本論に戻り、啄木からうたに歌われた菊池の「漢詩」へと目を転じてみたい。これは以下に引く啄木の日記に書き留められたことで、今日にまで伝わる一首と言える。日記中の「鷺南」は菊池の号で、そもそも「十年まえに…」の歌は、この日記の情景を歌うものであった。

夜、北東の奇漢子菊池武治君が来た。自分で手打つて女中を呼んで、ビールを三本云附けた。横山君も来て飲む。既にして唐詩を吟じ出した。自分も吟じた。鷺南筆をとつて柳暗花明の詩をかく。

柳暗花明楼又楼

月高沈曲響愈幽

艷姿二人倚欄立

笑弄春風心暗愁

(柳暗花明 楼又た楼、月高沈曲 響き愈よ幽なり、艷姿二人欄に寄りて立ち、笑いて春風に弄するも、心は暗に愁ふ)

慷慨淋漓、九時頃帰る。

(明治41年3月26日日記)

菊池の漢詩について言えば、まず第一句目「柳暗花明」は、宋代の詩人陸游の「山西の村に遊ぶ」から、「山重水複疑無路、柳暗花明又一村」の一部を借りる。押韻は下平尤韻。第三句目では「人」の字の為に、二四不同の原則を犯す。けれどもそれ以外には技法上の問題は特に見えず、正統な七言絶句の枠に収まる作品だと言える。生い茂る柳の色の暗さに花の色がますます映える春の夜、そして愁いを秘めた艷姿という内容は、これまで繰り返されてきたあの豪快なイメージからは、聊か遠い。しかしここで注目すべき事は、内容はともかく、菊池が漢詩文の教養を一通り身につけていたという事実なのであった。

以上の日記や小説の存在から、啄木が菊池に対して好感をもったことは確かと思われる。しかしそれは決して全面的な賞賛、敬意と言う訳ではなかった。なぜなら先述したように、出会った当初から啄木は、「菊池君は漢文にアテられた男である。」と、その人物性には同時に、人生の失敗とその原因を見出していたからである。

そもそも一般的に明治期と言えば、半ばにやや反動があったものの、社会全体の流れは西洋化、近代化へと向った。その中では、西洋近代の学問を身につけ、競争心を煽りながら地位や権力を勝ち取ることが、成功者の条件であった。こういった条件が菊池に備わっていなかったことは、啄木の日記や小説からも明らかである。いくら漢詩文が作れ、義理堅く友情に厚い、東洋の古典の豪傑の風を持つ人格者であっても、それだけでは、社会的成功者になれなかったのである。ここに啄木は、好人物と認めるだけに、菊池に対して深い哀れみを抱ざるを得なかった。更に資質や目標に違いはあったものの、社会的成功者の列からはみ出している点では、啄木も菊池と同じ立場にあった。自らの才能を確信しながらも、故郷を飛び出して北海道を彷徨い、また東京でどん底の生活を余儀なくされていた境遇が、何よりもそのことを物語る。だから啄木の、酒に酔って昔に作った「漢詩」^{かうた}を歌い出す友人への視線は、そこに自身の姿も捉えていた。菊池を通じてこそ、啄木は何憚ることなく自身を哀れみ、そして慰めることが出来たと言える。

4. おわりに

では最後に、啄木の漢詩観、つまり啄木にとって漢詩がどういう文学形式であったかを、ここで改めて考えてみたい。まず啄木は漢詩に対し、その日常の言葉とかけ離れた文体やリズムに対する興味こそが、かなり強かったように思われる。例えば本稿では直接触れなかったものの、啄木には友人達と、或いは一人旅先で、感情の高揚に任せて漢詩を朗誦する様子が見られた。：「日暮れて千駄ヶ谷にかへりぬ。燈を囲んで話すうち、いつしか話頭劇壇の事に及び、(中略) 兎角するうちに夜はいたく更けわたりぬ。李白の詩を誦したるも倦み…」(「わかば衣(二)」)、「上甲板の欄干に凭りて秋天一碧のあなた、遠く日本海の西の浪に沈まむとする落日を眺めつゝ、悵然たる愁懷を蓬々一陣の天風に吹かせ、飄々何所似、天地一沙鷗と杜甫を誦したる時、…」(『閑天地』(十五))、「四時半頃から有馬君のために催した釧路座の薩摩琵琶会に行つた。(中略)佐藤衣川子の劍舞には僕が詩吟をかつた。」(明治41年2月15日日記) そもそも啄木の生きた明治期は、前田愛氏が指摘したように、書生たちの間で漢詩の吟唱・暗唱が「出身地・出身階級の差異を超えて、同じ知的選良^{エリート}に属する者同士の連帯感情を通わせ合」い¹⁶⁾、同時にそれ

¹⁶⁾前田愛『音読から黙読へ—近代読者の成立』p. 180 (『近代読者の成立』 岩波現代文庫) (岩波書店 2001)

を増幅させるものとして、盛んに行われていた。勿論、啄木も知的選良^{メリット}を自負し、漢詩の響きに陶醉した若者の一人であった。また漢詩を制作する際に声に出して読むこと事態は、当然の行為だったと言えるかもしれない。しかし啄木の自作漢詩に見られたような、平仄や押韻に囚われず、漢字を並べてその時々感情を表現する様子は、自身の日常の言語との違いを視覚的及び聴覚的に、より積極的に楽しもうとする姿勢だったと考えられる。もしそうでなければ、自らも認めるような技巧的に問題のある漢詩など、敢えて作ろうとは思わなかったはずである。

更に啄木は漢詩の音やリズムだけではなく、その描き出す内容、そしてそれが漢詩の形式をとることで生まれた自身との間の距離、或いは隔たりを意識し、それこそを楽しんでいたと思われる。実は従来の研究では、啄木の漢詩観は中国古典文学の受容状況と共に、その短い生涯の中では何度か変化したという指摘もあった¹⁷⁾。しかし自由で気楽な自作漢詩や思い出の漢詩を歌う姿も合わせて考えれば、やはりそこを貫く一定の基調があったように感じられる。以下に示す晩年の書簡は、この点に関して一つのヒントを与えてくれる。

…転居以来読んだのが芭蕉、蕪村の句集と古詩韻範といふ漢詩の本だけと聞いたら、君も多少の哀れを催してくれるだろう。芭蕉は時々感覚を心地よく働かした句はあるけれども概してイヤに風流人がつた月並のひねくれが並べてあるので好かないし、蕪村は好きには好きだけでも、二度読み三度読めば、矢張常套の配合法が目について興味索然とする。古詩では李白や杜甫の自在な手法も面白いが、僕は寧ろそれ以前の簡古素朴な作風を愛する—現在の僕の生活とかけ離れてゐることの甚だしいだけそれだけ愛する。
(明治44年8月26日 宮崎大四郎宛書簡)

書簡中の「…古詩では李白や杜甫の自在な手法も面白いが、僕は寧ろそれ以前の簡古素朴な作風を愛する—現在の僕の生活とかけ離れてゐることの甚だしいだけそれだけ愛する」は、心身共に疲れ切った状況下での、『古詩韻範』¹⁸⁾中の詩に対する啄木の批評であった。しかし自らの「生活とかけ離れてゐることの甚だし」さを愛する気持ちは、啄木の漢詩一般に対する傾向だったと言えまいか。これには啄木の生涯において、漢詩を中心とする中国古典文学への関心が最も高まった時期が注目される。実はそれは、北海

¹⁷⁾前掲、池田、pp. 70-81

¹⁸⁾古詩韻範 五卷。備前の武元登々庵が文化(1804-1818)年間に撰じたもので、古詩の韻脚法を十二格に分けて説明する。近藤春雄『日本漢文学大事典』(明治書院 1985)参照。

道から単身、小説家を目指して東京にやって来た明治 41 年に集中した¹⁹⁾。そしてその後、朝日新聞で校正係の職を得ていた時期には、このような漢詩、中国古典文学への傾倒は見られなかったのである。先述した通りこの東京暮らしとは言えば、創作活動、及びそれに伴う経済的行き詰まりにより、啄木を心身共に窮地に追いやった。こういった状況の中で、啄木は中国古典文学に激しく傾倒し、自作漢詩三首のうち二首をも制作していたのである。

啄木にとって、小説をはじめとする自身の日常の言葉で書く文体こそが、出世、富といった現実生活に直結するものであったのに対し、愛読・愛唱し、また自らも表現した漢詩は、そういったものと直接関係の無い世界—中国古典詩人の、またその枠に合わせて表現された日本詩人たちの精神世界—であった。つまり杜甫や白居易の詩を鑑賞する傍ら、平仄や韻に囚われない漢詩を制作して得られるものは、自身の日常の言語が持つ字面、響きとの異質性であり、思い出の漢詩を歌に歌う時は、現状との距離感であった。そしてそれらを確認することが啄木にとっては、小さくは気晴らし、大きくは慰撫となつたのである。自らと漢詩との隔たりが、形式的にも内容的にも「かけ離れてゐることの甚だしいだけ」、啄木はその時々の病、貧窮、挫折といった現実をも軽々と飛び越え、一時、自らを癒すことが出来たと言える。

漢詩は啄木にとって、究極的には自身の表現手段に成り得ない異国の調べ—からうた—であった。この漢詩と自らの間に横たわる文学的技法、及びその形式によって内容上に生まれる自身の現状との隔たりに、啄木は気づいていたものの、敢えて埋めようとはしなかった。寧ろそれを認めた上で、常に少し距離を置いて眺め、時折自らそこに遊ぶという姿勢を維持した結果が、本稿で取り上げた自作漢詩、そして「漢詩」を歌う歌であったと言えよう。

近現代期には鴎外や漱石のように、他の作品同様、その漢詩が技法的にも内容的にも、高く評価される人物は確かに存在した。しかし同時にその周囲には啄木のように、文学的伝統に囚われず、漢詩の雰囲気に触れることこそを求めた人々も、相当にいたと思われる。

《主要参考文献》

池田功「石川啄木と中国古典文学」(『明治大学教養論集』第 263 号 1994)

石川忠久「岳堂詩話—啄木と漢詩」(七), (八) (『學燈』第 97 卷第 10 号, 11 号) (丸善 2000)

¹⁹⁾前掲、池田、p.69

- 岩城之徳『啄木全作品解題』（筑摩書房 1987）
岩城之徳監修『石川啄木入門』（思文閣出版 1992）
国際啄木学会編集『石川啄木事典』（おうふう 2001）
林丕雄「啄木と中国—唐詩選をめぐって—」.(『論集 石川啄木』)
（国際啄木学会 1998）
吉川幸次郎『漢文の話』（ちくま文庫）（筑摩書房 1986）